先代からのメッセージ

神の湯本館 墨書や刻印

振鷺閣 白鷺

羽の刻印

振鷺閣の屋根を修理するために、頂上に頂く道後温泉本館のシンボルである白鷺を取り外しました。白鷺の羽には刻印が刻まれており、道後湯之町初代町長の伊佐庭如矢の名前を始め、神の湯本館建設時に携わった人々の名前が確認されました。

過去の文献より、刻印が刻まれている記述はありましたが、このように実物を見ることができるのは大変貴重です。

振鷺閣 解体状況

垂木の墨書

振鷺閣の銅板や葺屋根野地板、垂木等を解体したところ、垂木から宝珠のデザインを記した宝珠通りと書かれた墨書が見つかりました。通り名に記号が確認されたのは振鷺閣だけであり、大変珍しいです。

神の湯本館 屋根

調査の様子

種類ごとに並べられた瓦

小さな刻印

職人の刻印

力士の落書き

後期工事で取り外した瓦は約2万枚あり、採用・不採用の調査と同時に多くの刻印が刻まれた瓦を種類ごとに並べて歴史の調査も行っています。

一枚一枚丁寧に調査を行い、当時の職人の名前など記録を残し、後世に伝えていくことも保存修理工事にとって大事なことです。また、調査する中で名前だけでなく力士が落書きされた瓦が見つかり、当時の職人の遊び心も記録として残していきます。

詳しい作業の様子は動画で公開しています

湯釜紹介

はじまりは奈良時代から使用されていたと伝わる道後温泉の石製の湯釜は他の温泉地では見られない独特の趣があり、道後温泉の魅力の一つです。現存する13の湯釜について、歴史的価値などを紹介していきます。

第8回

いこいの家 湯釜（ゆがま）

昭和28年（1953）に「第8回国民体育大会」のために、現在の「椿の湯」の場所にあった「西湯」、「砂湯」を改築して、「椿の湯」を建設しました。湯釜（直径55cm、高さ175cm）は松山の伝統工芸品である姫だるまをイメージした卵型でした。昭和59年（1984）に再び「椿の湯」を改築した時に高齢者や障がい者の方が利用できる「いこいの家」を設置し、その浴室で卵型の湯釜を再利用し、現在も変わらず人々の心と身体を癒しています。

椿の湯女子浴室（昭和28年頃）

文化庁

修理現場から 文化力 POWER OF CULTURE

■補助事業名／（重文）道後温泉本館神の湯本館ほか7棟建造物保存修理事業
■補助事業費／国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金
■施工者／門屋組・成武建設・富士造型特定建設工事共同企業体　■監理者／文化財建造物保存技術協会

道後温泉本館は、霊の湯で入浴できます。

※神の湯（男・女）、2階・3階休憩室は休止しています。
※営業時間や入浴料など、詳しくは「道後温泉公式サイト」をご覧ください。

■お問い合わせ先
〒790-0842　松山市道後湯之町4番30号　道後温泉事務所　TEL.089-921-5141

［道後温泉公式サイト］
https://dogo.jp

愛媛 松山 道後温泉

歴史をつなぐ 未来へのこす

重要文化財 道後温泉本館 保存修理工事

第8号　令和5年（2023年）3月

道後温泉本館の紹介

神の湯本館

明治27年(1894)竣工。
桟瓦及び銅板葺の木造3階建で、1階に浴場、2階・3階を休憩室とし、入母屋造の大屋根の上に塔屋を設けています。

又新殿・霊の湯棟

明治32年(1899)竣工。
日本唯一の皇室専用浴室のある又新殿・霊の湯棟は、銅板葺及び檜皮葺の木造3階建で、正面(東面)に御成門があります。
(※1階で入浴できます)

南　棟

大正13年(1924)竣工。
養生湯として建築され、神の湯本館と同じく、桟瓦及び銅板葺。修理前は、神の湯女子浴室として使用していました。
(※1階で入浴できます)

玄関棟

大正13年(1924)竣工。
神の湯、霊の湯、養生湯の各浴室に入浴できるようにするため出札口として建設されました。昭和10年(1935)の神の湯を曳家した時に現在の玄関棟としての役割に変わりました。

明治27年(1894)の改築以降、大正、昭和、平成、そして令和、時代とともに輝き続ける道後温泉本館。営業しながらの重要文化財の公衆浴場の保存修理工事は、日本初の取組です。

神の湯本館浴室　構造補強

機材搬入

掘削

引張材

引張材挿入

施工中の浴室状況

神の湯本館浴室は昭和10年に木造からコンクリート造に改築されました。今回の工事では地震への備えとして浴室の構造補強をおこない、隣接する神の湯本館の地震の揺れも抑えます。浴室の構造補強は、既存壁の内側に鉄筋コンクリート造の壁と基礎を新しく設置して互いに緊結します。新しい基礎は床下に設置しますが、地震による建物の倒壊を防ぐため「アースアンカー」を打設して基礎と地盤を繋ぎます。アースアンカーの掘削機は一番小さい機器を選定しましたが、現場への搬入は数センチしか余裕がなく、狭い本館内部を慎重に確認しながら進めました。所定の位置で約14mから16mの深さまで掘削しアンカー(引張材)を人力にて挿入した後、アンカー周囲をセメントグラウトで固め、地盤と緊結させました。試験を含んだ合計9本を約1カ月かけて施工しました。

構造補強の施工状況

鉄骨補強

合板補強(床)

合板補強(壁)

鉄筋コンクリート補強(基礎)

鉄筋ブレース補強(天井裏)

人がつなぐ 担当者の声 【構造一級建築士】

Q. 道後温泉本館保存修理工事の構造補強とは?

A.道後温泉本館は、多くの方々が入浴される温泉施設ですので、地震時の安全性を確保することが必要です。今回の保存修理工事では、大地震時に倒壊しない耐震性能を目指して補強を行っています。しかし、本館の雰囲気を壊すような目立つ補強をする訳にはいきません。本館は重要文化財でもあるので、文化財的な価値を損なわない補強方法を採る必要がありました。建物の解体範囲を最小限に抑えながら、壁の中、床下、天井裏など、できるだけ目立たない場所を中心に補強を設置しています。計画から工事段階に至るまで、長い時間を掛けて、多くの関係者が検討・議論して形にした耐震補強です。皆様の目に留まることはほとんどありませんが、ひっそり隠された耐震補強について想像して頂けたら幸いです。

詳しい作業の様子は動画で公開しています

公益財団法人文化財建造物保存技術協会
鈴木　律さん

道後温泉本館保存修理工事の進捗状況 (令和5年3月時点)

解体・調査後、地震への備えとして構造補強を行った場所から、工事前と変わらない姿へと戻す作業を行いました。屋根では2万枚に及ぶ瓦の調査が完了したため、再利用する瓦や新規製作した瓦を葺く作業に取りかかっています。平成31年1月15日から始まった本館保存修理工事は順調に進捗し、令和6年に完成予定です。

◆ 神の湯本館

屋根裏に地震の揺れを抑える鉄骨の筋交いや、浴室床下に新しく鉄筋コンクリートの基礎を設置し補強壁と緊結させ、建物を支えます。2階休憩室や3階個室では天井の復旧をおこないます。

◆ 玄関棟

特徴ある屋根形状に合わせた構造補強や床下に新しく設置した基礎と建物を緊結させることで、地震に対して建物を強くしていきます。

◆ 事務所棟

屋根瓦の下地には、建設当初に葺かれた「杉皮」があり、状態が良くないものは取替え、使用できるものは再使用します。この杉皮は現在の屋根の下地である防水シートと同じ働きがあります。保存修理工事において建設当初の仕様を残すことは重要なことであるため、「杉皮」を使用して工事をおこないます。